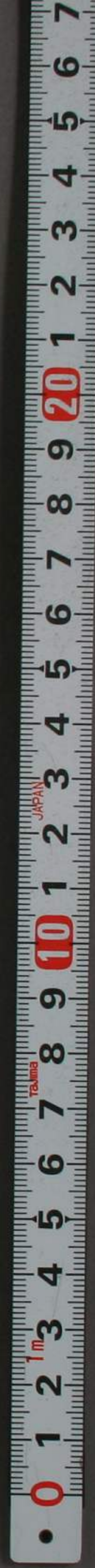


重修真書太閤記

八編  
三





特 18  
門 5  
號 459  
卷 73

消  
福  
兼

重修真書太閤記八編卷之七

諸將清洲の城に會合の事

并柴田佐久間内談の事

尾張國春日井郡清洲城に北畠中將信雄卿の居城あり  
然るに信長公西國進發の間東國の押えとて在城せ  
られけり天正十年六月二日明智光秀逆心し二条本  
能寺の御旅館へ押寄責奉りしむ右大臣家老の面々  
らむれし由四日の早天に聞えしむども家老の面々  
打寄評定しけりそれらるる事定めて明智一人の胸  
間より出しにらあるるに定めて一味同心の力に

同  
會  
攻  
印

大開已八編卷之七



多かるべしうわりの出陣其詮ある中と長詮議に六  
 七日を過しける内小安土へも明智が軍勢馳向く攻  
 けし御臺所をめぐり幼稚の君達つづれも日野の蒲  
 生右兵衛大夫が許し忍むせ給ひあんと取々に沙汰  
 たりければ爰へも必定寄来るべし然る何とて防  
 ぐべき中と心々其用意ををありたりける  
 流布本に前田徳善院法印三法師君を供奉して清洲  
 へ落来りて處へ安土より蒲生右兵衛大夫中將殿の  
 北の御方をめぐり幼稚の方々を御供し奉りし由を  
 記をとりしども誤あり三法師君も日野へ御入あり  
 しと明證あり御臺所ありびし中將どのく北の御方

白蒲生が元より預り奉りし所也  
 兎角するゆゑに都あつて光秀將軍に任じたりあど明智  
 を引りぬも多うありあは是を誅罰せん又容易あら  
 すと評定は徒日を費しあは羽柴筑前守西國より馳  
 登り山崎小於く一戦し終り明智を打滅しける由も聞  
 えしゆゑさあさだに羽柴筑前守西國を切平けく其威  
 勢諸人小まくれしに今又明智を誅して君の仇を復  
 ける大功あり信雄君手を虚しく上洛あらんを願  
 面目あさに似たり然のちあは神戶三七殿ハ筑前守  
 と共に山崎へ出張ありしと云説もありあは上  
 京容易ふありしと思はれたる處へ柴田修理進勝







併道理の外は勝へに筋ありけり但今ハ故殿の御仇を打  
 果しゆへに御遺跡の評定こそ尤大切よゆおれ然るを  
 今日まで筑前より此方へ何とも申入ぬと頗る越度  
 たるべく存ゆ因て御遺跡の評定の為と仰られゆて諸  
 將をりさるべくゆ左ゆて筑前も必定参向仕るべくゆ  
 其節の次第あり筑前も喧嘩ありけり是を殺し可申  
 と申け流バ信雄を始何も此義尤くゆるべくとて諸將  
 を清洲へ呼集りらる其人々ハ羽柴筑前守池田勝入  
 齋丹羽五郎左衛門尉蜂屋出羽守高山右近大夫筒井順  
 慶中川瀬兵衛佐久間玄蕃前田又左衛門佐々内藏助森  
 勝藏毛利河内守以下一人も残らぬ参會とり勝家めと

をらく佐久間玄蕃を招きて申けるハ筑前も今度の忠  
 切莫大あるとハ誰にても傾け申さる理ありれば此よ  
 りして筑前が威勢を以て我等をささぐり陥れゆを  
 んぞらん然を彼是あふそを彼を妬むと人ハいもん  
 只今秀吉と勝家との争ひ及むん時其方飛ぬと  
 と筑前と拉殺し申さるやゆとゆ元より短氣  
 の玄蕃也一議に及む承知し心よらる其坐し臨  
 むこそ評定の坐上あら柴田修理進勝家故殿の妹の夫  
 とゆひ當家の老臣也涙あぐらに發言しける様故殿の  
 御事ハ面々此心中我等と申すは如何と思はるにや  
 御遺跡の評定ハ如何と思はるにや



是こそ各々の異見を承りて腹藏あけ申出らん  
ゆくとありし何れも口を箴んで詞を良りて  
筑前守申けるは柴田殿の仰よ何れも故殿の御事  
申べし詞もなき御遺跡の御事ハ既正嫡正統の申し  
まゝのものと今改りて御評定との義不審に申すれば  
勝家膝立ちを申す申す筑前守正嫡正統のわきまを  
ハ何をさして申されゆと三七殿御邊とてり山崎へ  
御出馬ゆひを以ていも修理進ハ心得ぬ  
と怒り聲を申ければ筑前守あ静りて申柴田殿の  
仰あて腹藏あけ申せとゆに秀吉ハ腹あわりの處  
を申せしに三七殿ハ某と共に御出馬ゆて御合戦

も遊を三七殿を主君と仰ぎ奉るべく何とて今  
日御評定の御坐へ出仕ゆべき申す誠は道理あれど  
柴田も返し詞あけ然正嫡正統と筑前守のいささ  
ら誰殿まきまのぞやと申すに秀吉然が故殿の  
御嫡子ハ中將殿より申す中將殿の御嫡子ハ三法師  
君に申すは是こそ正嫡正統と申すれ但此外ハ  
故殿の御跡式は立を申す御方やわきまの存  
し今日此御坐席へ參上仕ゆあれと申す其時勝家申け  
るは何さま三法師君御正嫡御正統たるを誰か  
別意あけゆへども御幼稚ふかしく申す西ハ毛利大  
友嶋津あどの東ハ北条上杉伊達いつれも弓矢巧者



にゆきのを征伐あらせられ故殿の御志と繼せむらん  
と難くやゆらん付て三法師君御生長まで北畠殿三七  
殿を御後見とあめざ可やと存ずるハ如何ゆらんやと  
やとバ秀吉袖の合あハ珍敷御評定あハ北畠殿の故  
中將殿御同腹の弟君よまハ伊勢國司の御養  
子にあせむら北畠殿の侍中ハあとの清洲は伺  
侯しゆゆり神戸殿ハ御別腹よまハ伊勢  
の神戸は御遺跡にゆ左ゆハ此兩殿あそ三法師君の  
正しき叔父君よまハ伊勢の御家臣さちハ北畠  
神戸の家の子譜代あゆさそそ諸侍中の寄合ハ當家譜  
代重恩の方々と他家の人々と會合してハ心中と盡し

かゝるゆらん左様の處より異論起りゆらん自然  
と家中三つ立り可や如君補佐の御政事と思え  
まどゆ抑柴田殿ハ御年膳とハ累代の御家老とハ御幼  
君御生長まで御補佐あせられゆらん小誰ハ御下  
知を背さやと三法師君御幼稚とハゆとともを三  
歳にあせむら八幡大菩薩ハ胎内あまハまをきん  
武内大臣ハ補佐しゆゆ三韓追も退治ありしと承を  
る柴田殿武内とあせむら鳴津あゆゆれ北条ゆ  
ゆ誰ハ從ひやさるべき此ゆと定りたるを彼是  
と御評定ゆものいづしき上若又柴田殿の御補佐か  
たゆけやゆゆゆ秀吉只一手に打碎さ可やに



てゆと申けきバ勝家も黙然として言ひをば佐久間も  
 取付べきすきも那れバ勝家か顔をまうり筑前守を  
 見おくり腕をさすりておくりけり是ハ筑前守山崎の  
 功より定めて三法師君の御後見して諸將を進退せ  
 んと云べりればそれより事を起して喧嘩を仕出しそ  
 の上にと玄蕃も事をあさせんと計りてそのすくと徒  
 事とありしおふ二人とも内心よ末始終のつらあらん  
 と思へども秀吉の詞正しく理をこしもすさやあさり  
 故小勝家も詞を出さざり也佐久間玄蕃筑前守に向  
 ひ筑前守殿のつらありて處理至極あは然しあうら北畠  
 殿神戸殿とのれ三法師君の叔父君よ在るバつづまうも

兩御所を以て御後見よ立らせんと順道かと覺ゆ叔父  
 はくゆ勝家近年老衰ゆ及びゆへに御後見の事如何  
 ありんさか存ゆ兩御所よ筑前守殿御さ添ゆて天  
 下の大小事御取計ひ尤然るべくゆと申ければ筑前守  
 のゆとよ佐久間どの左様小仰られぬ柴田殿御年高  
 と申せどもゆと御壯健にて勿々御老衰と申へりら  
 び筑前事ハ御存の通り柴田殿の御影を以て御家臣乃  
 列るも加をりゆり此あり何とて柴田殿をさ置左様  
 あさし出申へりや只故殿の御時の如く西國の御先手  
 仕るんさあてゆと申れば玄蕃も案よ相違しさすか  
 に横紙も破るるね手を拱くを居たりけり



流布本と柴田佐久間の問答ありり小鄙俚にして事  
實相違を依り別本と因て改削す  
秀吉理を述て諸將を服せしむる事

并勝家長濱所望の事

柴田修理進勝家胸中の計略すべく相違をいへり何  
といはんも俄の事にして然るべき策もあられバ筑前  
守に向ひつらに筑前守御身も某も甲冑ハ脱間もかく  
股ハ馬上よりこをし雨露霜雪小身を勞らけり  
言までりめく故殿の御事ありしより不思議あり一  
席に集りしと不幸の幸とやべしつきの如き再會期  
めしつぎや一獻酌べしといふより勝家と筑前守

亭主の坐し居り諸將を客にせしめしに銚子土器  
引をもちしめば勝家より大土器を取亭主の役は御試  
ひとすべしといひひりありくと受とぐつと乾しめば  
筑前守あれを肴にといひさま蝦魚の熬焼を出しける  
と勝家取よりちやく只一口に七つ八ちり喰盡し  
た大土器を幾度となく傾けそのち其坐し倒れ  
大軒おきて卧たらし傍若無人といひつべし是ハ筑前  
守に腹立ちんとの趣向あり然れども筑前守これを  
見ぬよりはく諸大將と打とけ物語りし更に余念おけ  
よりておしけるにより修理進と眼をさす筑前御  
邊ハ都より久し住むへバすべし華奢風流と見えて禮



儀あり我等ハ田舎武士その上近年北國に住て鹿猿小  
のとおれ近付たまふりのと殺風景にさざめく  
わくわくありひひと然ども御邊と我等と奮奮好  
をいへば馬下あつと藤吉とよびりりり國を切開  
き人数ちりち城をも多くりちて大名といわれ我等と  
同ド建は膝をくも一ひ鈍子の酒のそて打解つる今  
日のたのしきなんと不思議の因縁あふやその上御  
邊の勸りうりて勝家天下の御後見とあれは越前北庄  
より近江の安土へ程遠し御邊の長濱を某は給へ御  
邊ハ明智が關國のうちづれあて心は任とせんと  
いひければ筑前守尤の御所望あり神速と避渡しやん

と答へつる修理進大は喜び神速は得心ありて長  
濱を御渡しつるへき由厚めとけあけり然る近日の  
うち佐久間玄蕃を受取遣はせしとけりけるいふり  
筑前守のや佐久間殿に御渡しやまるといふ佐久間  
大は怒り何故よこの玄蕃に渡しむをぬぞ其旨趣を詳  
に説くその渡すむをぬと云譯みらる其坐ら起せし  
と刀は柄は手を掛けて立向へば一坐の面々をや事の  
出来さふんと手に汗を握りて見居たりけるに筑前守  
いと長閑はか静り玄蕃殿左様おせさるふあは長濱ハ  
江州平均の功を御賞美あつて賜りし處あり秀吉か  
身に取て最大切の城地あれども三法師君御後見たる



柴田殿の御所望おれば故殿へ直に御返り上り心得  
に速に避つて奉る處あり然るに御身を以て御渡  
し申すに聊以て心は安らぐれ處のゆあり其故のゆ  
はと申す御身は柴田殿の妹御の子おれども柴田どの  
乃御子に伊賀守殿のおをりまはるを聞ては但  
甥ハ子にまさる理のゆあやのゆはと申すれども  
辭なく牙をわし奉を握り扣つて勝家こを聞て筑  
前守の心入厚きを今始喜び入てゆ何さま勝家が  
子のゆとさしおき甥の玄蕃に請取せんと申つるハ勝  
家誤りてゆいづるの伊賀守を以て請取べくゆとて  
殊に心地よけに見えしゆが玄蕃も理は折其まゝに坐

席をさつ勝家長濱を望みしとハ定めて筑前守これを  
否むべしゆあまふをれより事を引出しそと策すに  
凡人あしぬ秀吉おれば勝家の胸中を早く悟り心よく  
是を受引つ長濱受取つてのまに付て勝家勝盛盛  
政三人の間は不快を起させし深慮を誰も知ざりし  
後筑前守語られらるハ勝豊と申すの實は勝家の子  
にあらず家老の今井治兵衛といふりの子ありをれ  
と勝家養子とあり伊賀守といふ名來せし也盛政ハ實は  
妹の子おし結句養子の勝豊より親しくありけるを  
と知つれば盛政して請取んといひけるを拒し也さ  
るとて養子と甥といふの親しき各別のまありといひ

六月二十八日



此れバ勝家も争ひのついで勝豊もとを云へ也されど  
 もをのづと勝豊の心よ養父の盛政くこといひつる正を  
 恨みさせ盛政よハまう勝豊あつとあもたむ互一箇  
 の恨問をのりさせ謀ありんより勝豊養父をうら  
 みの筑前をたのりきりはと思ひ養父を疎を某を頼  
 りのるにとう終父子の間隙を生させ也又盛政も  
 勝豊を失ひあ柴田が家ハ我りのとありあ様よあゆり  
 一と只この一席の問答はるなりとあ戦國の間人心  
 さても知得のこさをもじ勝家ハ筑前守を打殺さんと  
 せ謀ハ成さうしありのあゆりに長濱と取得し  
 正成喜びあつび土器とりて筑前守にさけ筑前守下

戸ありとて強くあひける盛政まみ出天下の御後見  
 たる勝家が土器のあつてあつて筑前守の坐上の  
 上首あり上首より左様の例を出されんと近頃その意を  
 得むと申けむ筑前守これハ誤仕何さま御後見より  
 賜たる土器あり更よのあつて申すと云よりを申大土器  
 を引受只一息よのあつて勝家返さんとあけけるを  
 勝家聲け見事ゆとそりのあつて三盃のあつてあつて  
 のち賜をりゆとんと申すと筑前守然も何を御着  
 せとつ其時勝家をみより着とつて何よけんあつて  
 せとつ丹波の國ハ當時關國長濱のあつて何よけんあつて  
 んそれにく不足よりのあつて勝家が首あつても手足に



ても御望みぞろよまうせとくをさみりえんといひし時ときは辱はげを  
その御肴みさかのゆまへんといひさる三盃さんざいのの見事みごとにの  
りて勝家かつかよさる勝家かつかも筑前守ちくぜんしゅハ下戸したとありとありひか  
が無理むりよ強しんとまふ丹波國たんぱのくにともゆるやとある上うへ首くびを  
も手足てあしをむといひつるとも悔くやしさと心の中心こころのちゆうしんに  
めんども早はやい出でしとねむる後悔ごくわいをれども甲斐かいを  
ま筑前守ちくぜんしゅまうと上戸うへとありと常つねよ偽いつはりと下戸したとありと  
いひしとを眞實まことと思おもひ柴田しばたが計畧けいりやくをへてまを畫  
餅もちとありける口くちさ佐久間さくまと共ともよ只二人ただふたりあり合あは  
つりにをむと心こころを苦くるしめけるともや

重修真書太問記八編卷之七終

重修真書太問記八編卷之八

龍川左近將監柴田修理進相談の事

并秀吉勝家の腰をりむ事

龍川りゅうせん左近將監さこんしやうげんハ三國峠さんこくとうげあり上杉うえすぎの為ためよ敗軍さいぐんし厩橋うまはしへ  
引返ひきかへをば上方かみかたに右大臣みぎのちじん殿との御生害ごせいがいありし由よしの飛札とびはしに  
來きしける處ところは鉢形はちがたの北条安房守きたじょうやすらふしゅ氏邦うぢくに出張しゅちやうしすてに神  
流川りゅうせんを越こえ近々ちかぢかと寄來よききる由よし注進しゆしんありけれハあはれも  
後のちハ見みすべめはばさりとて人心にんしんをあまをて以もつて動搖どうごうし  
て十分じふぶんの合戦くわせんもあるま然しかんハ北条きたじょうをさむらうまて中ちゆうを  
やすと碓氷峠すいへいとうげを越こえ中ちゆうとありひ付つまら北条きたじょうが方かたへ使



者を立く主にてゆ右大臣信長公去二日ノ逆臣明智光秀が為し生害あり我等も上州を捨て上洛仕り弔合戦を心掛ゆよりて厩橋の城を御渡し可申也但某と是非御一戦との事にゆをぐ力あつく共神流川を打渡し鉢形迄も罷向ふべくゆといをせしむ安房守聞て偕ハ此頃の風聞實ありけり然し龍川厩橋を捨て上洛し主の弔合戦せんといふを遮り止ん理あり此方よりも使者を差向返答せんとて龍川が使を返し安房守の別の使を以て右大臣殿御事有ける由御心中察し入り付て逆臣誅伐のため御上洛のよし是又道理至極にゆ左ゆり首尾よく明智を御討ゆて重紛て御下向の時

弓箭の運をばたりゆゆ御心静し御旅行ゆ碓氷峠まで安房守が人数を少々ゆつらきゆゆ左もゆゆ指りの有るゆゆ足輕五十人鐵炮りせ龍川が先立と路を案内しければ安中松枝の者どり式代して通しける抑織田家の大將三人のうち西國に向ひ筑前守ハ毛利を拉ぎて上洛し龍川ハ敵を欺き敵路次を案内させて上りつるを似たきども居城を捨しハ云甲斐あり柴田ハ敵は啗止られ難義の軍して上りつるを能々ありひ合まればその優劣も自然とわかれつべし一益清洲へ參着しければ勝家大悦び耳に就くゆひけるハ京都の大變



さくとも其の中馳上り明智を伐んと存つれども其ハ  
上杉勢ハ跡を慕われ難義の軍に數日を費しけり  
筑前守手早く切上り只一日のうちに明智を責崩し  
坂本中も切取て光秀を日岡磔あり右大臣殿の御内  
葬を執行しその上禁裏に暱近し京都の大小事一人  
て取賄ひゆあり畿内の武士ハ筒井蒲生山岡池田高  
山中川をめぐり皆其旗下に従ひ其上ハ毛利三家と親  
之を結び播州備前美作中を彼が領する處あり自  
然と威權ありびやく如何ありして筑前守を亡く  
ゆをのぞ織田家の御為しめるべしこれを除く謀  
をとりけし一益中様つらあも我等故殿の御恩あり

關東管領とありゆひの刻も早く馳上り  
明智を討んと存じに遠路と中途の一揆は支え  
れ漸昨日今日爰まで上り着て承りゆへ彼猿め  
大功族とも悪くとも云へば柴田殿あり上杉  
の為は追迫をれ給ひゆり山崎合戦の後れあり  
つれは同じく猿をば一益と同じ様と思ふんさ  
今猿と中違ひしを誰々も猿を妬みその同士軍長  
けのやと批判せんそれのなす猿一味のり  
も多し猿が眷屬も定め三万三千餘ありゆへ然ら  
ば是と弓箭を取んて却て自滅を求る基あり唯  
緩々と思惟ありて猿が過を見出し是を鳴して一味を



結び然して後事と決り申すべしとて、是迄ハ和儀を  
 厚くせんを第一の計策に申すや、ければ勝家大に悦び  
 龍川柴田の御方とて、亭主とありて諸將を招請し、羽柴筑  
 前守を以て第一坐上の客とありて、三法師君ハ御代替の  
 御禮以下の評定、及びける北畠中將、信雄の御領ハ尾  
 張伊賀北伊勢近江の内、百万石にて清洲ハ御在城、三七  
 信孝の御領ハ美濃、あて五拾万石、岐阜に御在城、然る人  
 於次丸秀勝ハ丹波、龜山丹羽五郎左衛門ハ若狹、並ハ  
 江州高嶋志賀二郡、池田父子ハ大坂、厄ヶ崎兵庫、柴田ハ  
 長濱、五万石、秀吉ハ丹波、蜂谷出羽ハ三万石、中川高山ハ  
 五千石、宛加増ありて、由あり然して三法師君ハ安土

御移役ありて前田徳善院長谷川丹後守を御傳とて、  
 御臺所の御料、近江國の内、三十万石と評義したるけり  
 一書ハ龍川左近將監若狹及び近江高嶋志賀二郡と  
 あれども、龍川ハ伊勢、桑名、龜山あり、依りて取を  
 然るも勝家とて、秀吉に遺恨止りて、諸將會合の席  
 にく故殿の御恩を受く今日、我等式國持の列に加わり  
 ゆんども、我等身命を捨て御奉公とて、故のよに申す  
 父や祖父の武功も、只今に至りて開く處あり然る  
 小筑前守殿ハ御一身の勲功に、より御馬の口取より御  
 草履取御茶坊主御賄方と次第、小昇進よりて、今ハ播磨  
 美作備前丹波の國主とあり、中國の探題職とあり、あふ



奇代の御出世の御勤勞をありけり有べからば何れ  
御信仰の神佛にてゆくり又ハ然るべき内縁の御引立  
もゆり承りたりたりとやけれハ筑前守何さゆ御不審  
御尤も秀吉が斯まで成出ゆひ始を中と柴田殿  
の御推舉なりそのゆへ木下藤吉郎とせし御足輕の  
時ハ御館へ敷上りとの外ハ内縁の引立もあけ又  
信仰の神佛もあつとせし時勝家ありとや堪  
たや此間の辛勞より肩が張ると覺へたりあをれ昔  
の藤吉郎あり此痛を按摩せしめて給たりと云  
云ハ筑前守勝家の後へ廻り親も等しと柴田殿  
の御上ありとて御療治仕るべしといひさし肩より兩

腕わけをろくとめりゆぐしされハ勝家も案外のと  
ろの故は首を低て言葉あり是ハ秀吉も按摩ハた  
しその時ハ喧嘩せんと計りあり丹羽池田  
の面々も勝家の無禮をいづく憤り筑前守のあさ  
振舞をあをれ堪忍は死人中と深く感服たりけり  
勝家いづりゆりて筑前守ハ腹立せんとありけり  
あハ筑前守殿ハむろしより按摩ハ上手にあされり  
御臺あて肩の痛ハ和まらずこれよつて腰のゆさ  
肩も増たり慮外にゆへも親も等しといれし言葉  
のゆへハ腰を打ち給ゆりとありしハ筑前守左を  
ゆへとさハ打て進まると云ハ腰を徐と揉りあ

大問已八局



かな勝家もせん方あくうとくと空寐入しそを居たりけり  
 一言に筑前守勝家グ肩をのり腰をさすりおろす涙  
 を落されしを佐久間玄蕃允見とめち筑前守殿少い  
 比法の御心中や親よ等しといひあうら口惜く思を  
 れて落涙いさされゆハ口と腹とをうめよ一尺をか  
 どの間よちや虚言をすされゆ事武士の魂を何處へ  
 失ひあひしと怒るれハ筑前守の申とよ玄蕃左  
 様よこれを筑前守の藤吉郎とて修理どの肩腰  
 のとし時ハ御邊おどいしと生れし生れざるうけ  
 りその比の修理どの肩ハあつし肉ハあつし腰と  
 ても肥太り骨高かりしうを按にもいさ骨の折た

了り然るに今の修理どのハ肩も薄くあられく  
 肉和りに腰ハ中せそ骨も疼たりあく老あへりとか  
 のいつまハおもは涙の落しありといをれしかな  
 玄蕃允もいさきとけく黙然とて引退さぬとい  
 へり

佐久間玄蕃筑前守問答の事

并柴田佐久間へ密謀を示し事

佐久間玄蕃允とふく筑前守よ腹立をんとありけり  
 切ハ勝家ク腰を打れて快く寝たる体を見て筑前守よ  
 向ひゆに筑前守殿御身む切ハ木下藤吉郎とて御  
 足輕よもせよ今ハ播磨美作備前丹波の領主中國の探



大將言ハ終ニ  
題職たりそれク何クや勝家の肩腰をりてあつて追従  
とやいそん面諷とやいそり武士の所業と存ぞれむ  
とひひ時筑前守ハ涙ををりくと流し嗚呼世ハ末に  
あり切るゆきや左様の思慮あさき男を待大将とあり  
置るくとあふれり抑武士の魂といひりの八十人  
百人百人ハ千人千人ハ万人万人ハ十万人とありハ増  
とも身ハ一ハと知ア然ハ士卒の食事終りてのち大  
將一飯士卒執睡してのち大将枕よ著とゆや士卒疾  
病あれハ大将うつから是を診察し士卒に瘡ゆれハ大  
將これり膿を吮士卒ととも猶左様よすべしゆもんや  
是ハ舊好あり恩人あり筑前よりハ老輩あり肩腰ハか

あか何あても筑前が手に得たる事あつハ更よハあ  
べとてよありと存ハ夫を左様よゆもんや  
御身ハ組の侍中にゆきあり有とも見あつひ給をさ  
ろふや情あき侍大将中といひれり理あれハ満坐の  
諸將いづれも尤々と同心す玄蕃允も又いひうへをべ  
さ詞あくべし口してぞ扣たり筑前守又いひく秀吉南  
都へ参りハ時癩病人の風爐屋を見たり是ハあつし聖  
武天皇の皇后ハ光明子とやかきけり此皇后の御  
願として浴室を立ちあひあまこの病人の瘡をたせせむ  
ハより今に至りて断絶ありとぞ承たる皇后の御身  
はてた病人を哀まむは是を療治の浴室を立ちあへ

大將已ハ編卷ハ



了のまんや凡卑の我等は於了あや乞馬の癩病人をさ  
へ勞りあへりつらんや傍輩の古老を筑前守がせし  
と追従よりつらば面諛はあらばと言葉お淀まかく理明  
らうと迷ふらん佐久間も辭を和け何さま大丈夫の御心  
に耻入ては我等うせをさ肝おて量りおさき御心中の  
廣大あると此後ハ筑前守殿の御指南は預りや心に  
了のとやあがりバ勝家やをり起上り扱めく奮き好く  
ど嬉しきものらば天晴日本の大將軍たるべき筑前  
守殿う肩腰を摩あをり故うやさむどに痛う肩腰  
の常より快く覺えは玄蕃あど若輩あり隨分筑  
前守殿を見習へやと實は打とけて見へや列坐の

諸將も始て安堵の思ひを益々筑前守をよん頼母  
敷りのにありひ付し勝家とよく筑前守を滅か  
らぐ中と思ひやが玄蕃を呼近けき筑前守一兩日の  
内は歸浴するあらん其路次ハ如何は用心をもとも四  
五百餘騎にふよも過ぐこの間小工夫して人れを打  
て捨ぞ中と思ふあり其心せよ中と下知しければ玄蕃  
もわめて其心に我郎等どもを恐びくに清洲より筑  
前守が歸るべき路次へ伏せを待たりけり筑前守ハ天  
眼通をや得たりらん玄蕃が計りし路次は五人七人  
わめて我服心の者どもを或は百姓町人よ出立を  
せよハ族商人よあらしめて爰めし置しは佐久

木月己八編八



間が郎等との埋伏たるを一人も知らざれば探り知で  
ちゆく筑前守に告しめば筑前守ハ路次を替てついで  
の奥嶋へついでそれより湖水を真一文字に和途の郷  
へ打つて都へついで入しめば佐久間が計策ついでつ  
らふありにたり

又長濱の漁人の口碑に傳ふ筑前守清洲を發途とし  
時ハ加藤福嶋以下三四十人ハ過ぎついでついで佐久間  
もあをれ運の盡ぬる筑前守うかつて是を起しの渡  
ついで打捕んと起よついで待けども筑前守い  
で來らばついで不思議今朝ついで清洲を立りの  
かいつあれば今まで見えぬよや何条途中ハ隙の入

とぞ中と氣をいづち玄蕃只一人乞巧人ハ身を中つ  
し身に荒薦をまとい竹の杖つぎ南方宮重の在所  
を打りついで是を伺ふ筑前守稲葉の里ハ至りしを  
ぞ正しく見しと云人あれども稲葉より此方にてら  
誰も見し人ありと云餘りに不思議あれば清洲へ引  
返つてついでんと清洲へ至りて伺ふ引返たりと云  
誰も知らばついで起しと急ぎける路次へ玄蕃が家  
人走り來りよついで怪敷と云ゆ人只今墨股にて筑  
前守ハ逢しと云ひて過りゆ人ハ呼と云りて問  
糾しゆ羽柴殿ハ鐵炮五百挺長柄七百本弓三百張  
を前後ハ配り騎馬五百餘騎みて押行ゆ人の跡よ



鐵炮長柄弓の足輕幾百人といふ數も知れ混物具  
陣羽織前後に備えし其人數凡五六千人もゆらん  
ずらんとやてゆれ程の人數清洲までハつれ給を  
ばまゝ何處にわくして置れらん實に所しき事に  
てゆとわくするを聞て玄蕃盛政肝を消扱ハ清洲へ來  
て三四十人のわりふそれゆゑの人數をわくして  
連しとわくたり何様とせしやらん筑前守が計策  
の人と傑れし處りやそれを知む筑前守に出合た  
らば如何なる過をわ引出ん末代に有むと侍らふ  
と心の底に感とけるとありそのを柴田も傳聞終に  
信雄の耳に入けるはらう町の奉行村の役人等に仰

を委細に是を穿鑿しけむ筑前守の着以前より  
わのわく清洲の近處に乞馬人まゝハ六十六部あ  
らひの千箇寺の修行者あといのりの多く入込ら  
筑前守發途せしよりのちその体のりの一人も見え  
びありらるあを所中しくゆとや出しとあり其より  
して次第に穿儀しければ凡清洲の四方廿餘町が  
間より右体の者充滿たりしが筑前守出立此のち更  
左様のりの在らずあり也  
又墨股に黒塚といふ所のありそれが家に太閤のま  
だ羽柴筑前守と云ひし時清洲へ參向ありけるが  
ゆもく此黒塚が家にて郎等どのの衣裳を改めさせ



けるに庭の奥ある一室より夜の間はねけくと出立  
あふらうり黒塚が家のりめさへ筑前守總人數い  
ら計あて来りあひつとつめを成知むといへり  
又室江北脇と云處ハ墨股よりすとし西あるうその  
兩村の堺は楠と榎の杜ありこの杜の中に六七尺許  
の石あり是を太閤の腰掛石といふ太閤のゆふ羽柴  
筑前守といひつら清洲の會合は赴きあひける時  
この杜は供の人々の支度を替られしといひ傳ふ  
佐久間玄蕃ハ筑前守定め長濱へ入る引渡しの用意  
をあそめち都へ入あふんづられあも長濱へ立上  
らぬとあるまづと思ひしあは起しの渡にて打めら

ゆる時いと計りて大垣たる井關原玉村藤川春照と  
處々に人數を配りて待しあども筑前守とあひき旅  
人も見えざるあふりその者どもあされをてく引めへ  
玄蕃にわくと告しあは玄蕃も我策の相違をてを  
悔てたがりのゆをびて居たりしとあり  
一書に佐久間玄蕃允羽柴筑前守が歸路を襲ちんた  
り尾濃の堺ある起の里は伏を置いて待けるに待期過  
まど筑前守出來らばあまりに待あこがれ清洲へか  
へりて尋めれば今朝早く立あひつといふより又  
引返して求めど更は知は玄蕃あふりた氣をりて  
起の上ある笠松のりつりまゝに下ある中野前野の



あつりまて子細に穿議してければ此渡の渡子のいふ様この三四日の間やど京田舎の商人の清洲へ立入つてゆひの容易きと云ふあつて理や東國北國の大名の會合あればさぞか商ひもつららんさりとて清洲にそいさゆをぬらそあつてきあれといひつとわや是も筑前守の郎等どもの形をわへつとつられたり

重修真書太問記八編卷之八終

重修真書太問記八編卷之九

長濱城引渡りの事

并森勝藏人質を殺す事

羽柴筑前守秀吉が清洲へ参向しける供の兵士のつあつ三四十人ありしか共實の様々は形を替て爰彼處にわくし置ければ佐久間が計策を聞とそめまゝ起川の西より鐵炮長柄弓の行列を立ちつ安土へ伺候しをれより湖水を打とし京著ありしを更し知りのわく變化奇正を自在におり得し軍略ハ人との痕跡とらび古今無双の名將おればさも有ぬぐし佐久間猛烈と



つゝとも筑前守の出没不思議あるに驚きおまどひお  
るを仕出しあは毛を吹て疵を求むると云譬の如く  
後悔その詮あるべからばとて手を空しくして引返ひ  
柴田勝家ハ清洲を發し越前へ引還らんとして既濃  
州垂井小つとて熟と思ふ様清洲にて筑前守小腹立を  
んたぬ種々と計略を施しつるを筑前守も定めて知つ  
らん明日よりハ近江坂田郡に入べしそれより淺井伊  
香の二郡よりわづらずして越前に入べき路もあし此三  
郡ハ長濱領あり筑前守よりある奇計をや設つらん容  
易に敵地へ入るゝとて爰に逗留數日に及ぶ筑前守  
此由を聞て修理進も古兵ありさも有べし去あがら何

とて柴田の遺恨をふくむべけんや其疑心を散ずる仕  
様ありとて於次丸秀勝をて柴田を越前へ送らせけ  
り柴田於次丸を中に立江州路をゆるらぬ柳ヶ瀬に  
ゆくり爰より越前程近し筑前守の厚意感ずるに餘り  
ありとて數々の進物善美を盡し於次丸を京都へ送り  
けり於次丸といふハ右大臣殿の御子おれは勝家にも  
主人あり筑前守の子にして子に非ばそれを人質の心  
あて送らざる秀吉の心の底を怖るけし  
柳ヶ瀬より椿市中河内板取今庄湯尾脇本府中鯖江  
水落淺水福井を経く越前北庄まで凡廿餘里あり  
勝家北庄より飯り着て直に長濱の城請取し伊賀守勝豊



を差立を中とまらば使者を以て勝豊を呼勝豊越中陣より居城九岡より暫時兵馬の疲を休め居たる處へ北庄より使者ありて急ぎ参るべき由を以て勝豊元來實子に非に近比父子不快ありつるに火急の使者何事やらんと思ひしむもさて止むふあはねば北庄より馳参りし小江州長濱の城請取て彼處小住べしとの事ありしむが勝豊がこまらゆらて家老徳永石見守木下半左衛門與力ふい匹田左近大金大八山路將監神谷越中守等を引率して取りのり取あえは長濱さして進發を羽柴筑前守ハ長濱の城代湯淺甚助を呼て此度子細ありて長濱の城を柴田修理へ渡を間近きうちに柴

田伊賀守勝豊請取よ來るべしその時異議なく渡さるべき旨をやらたしその甚助を呼て小招き長濱を勝家よ渡すとゆいども遠くて三年近くハ明年の内小取うへ可中問能々在地のりめめめ付置計策ハ今此時ことり渡すべしその手段ハかうくと一書にて渡しむが甚助心得そのまゝ長濱の宿老檢斷以下知しければ何も畏れなく城下より入りその手便をふたりけり長濱の町人共ハ筑前守の此年頃の仕置と悦び居たる處ふれは柴田よ替りそを喜むは然るに遠りふは筑前守の手は戻るべき由を聞て然らば暫時の間的事あり何れとも筑前守の為とらしむ様は働くべ



ければ何れもく會圖の時刻を待て粉骨を盡すべしと  
 を勇らぬくくもく伊賀守勝豊ハ手の者召具し長濱  
 一に到りまづ町屋に旅宿し城中へ案内しけきバ城代湯  
 淺甚助出迎主人筑前守の中付し旨を答へ役所く武器  
 米穀を一書にしてこれを渡り伊賀守これを受取その  
 のち甚助ハ出城し伊賀守ハ入城し万事首尾よく天正  
 十年七月十一日ハ交代しけり其後京都にてハ諸郷  
 會議の上筑前守が洛中洛外まで仕置行届きハ事古今  
 一勝れ下々安堵し各々其家業を勤めむり太平に赴  
 きふんと是併秀吉が大功あり功を賞するハ政道の  
 先んずる處あり早く涯分の抽賞ありべしと御内意

度々に及びし處筑前守かく辭し奉りしうぶおと糸  
 て勅書を下さきそけり

去六月二日右大臣父子上洛の處明智日向守光秀企  
 逆意狀之殊二条御所亂入之条奇代之狼藉也不及是  
 非次第也其時秀吉至備中國與西虜合戰之處不移時  
 日馳上誅討明智一類報主之仇洛中洛外殆屬靜謐之  
 条古今希有之武功也於是抽賞之宣下及再三謙退固  
 辭之意亦神妙也雖然有功而無賞者王道之闕典也因  
 被叙從五位下任右近衛少將聽昇殿之条  
 天氣ハ也仍執達如件

天正十年七月日

藏人頭左近衛中將藤原朝臣



羽柴筑前守殿

とありりれば筑前守ありらば故右大臣家へ贈官贈位の御沙汰の様願ひ奉る次は送葬法事仕りて後御請可申由を奏聞しければ直に贈官贈位の宣下りりてれより本能寺に仮屋を立幕を打て四方を警固し法華宗十六本寺の能化所化を集り千部讀經を執行し鳥目一万貫白米千俵本能寺門前にて是を施行したりりりりバ浴中浴外のりの群衆しを尊びあり然御葬送ハ紫野大徳寺然るべしとして御遺骨を茶毘し御塔を造立し七月廿一日ハ七七日の忌辰され御法事を大徳寺にて執行し由を北畠神戸の兩公達をとり柴田龍川

丹羽佐久間あどすと織田家旗下の大小名中へ悉く使者を立て演達あり中にも濱松少ハ泉州堺より開道を経させられ御歸國有て急よ軍兵を催され明智退治のため御出陣ありける處六月十九日明智滅亡の注進を聞召定められ同廿一日御凱陣あり又甲州府中の川尻肥後守の許へ本多百助を御使して信長生害の由を告めひに川尻ゆりに心得たがひたり々々本多を切殺は是よ於て國人忽よ起り立川尻を切首を山縣三郎兵衛が同心たりし三井彌一郎これを取成瀬吉右衛門日下部兵右衛門岡崎次郎右衛門大須賀五郎左衛門等甲州よ入古府中及び市川陣して甲州先方の侍を招



かのあつしより甲州暫時は平均は屬は信州川中嶋の  
 森勝藏ハ越後へ亂入し大田切口にて一戦しけるに勝  
 利を得たりしに景勝の居城春日山までも即時小  
 切入んと勇たあける處へ信長公の御事柴田ヶ許よ  
 り知れしむ越後口の軍を還し上方へ切て上らんと  
 其支度をも伊奈の毛利河内守と同しく打立んとし  
 ける處は信濃國人春日河内守長一にゆけるは信長公  
 御事ゆりはるに御上洛の由にゆきもゆらんよハ  
 國人の素質とも御返しさてのち川中嶋を強く守りし  
 へと御下知ゆき可然とや々るを勝藏聞て大に怒り  
 其方共我等あつしび此處へ歸るまじと思ふ故は左

様の事をやあつめ悪さ汝等が云條中と云て更し得心  
 せざりしむ國人騒ぎ立勝藏が路次を塞ぎて是を止  
 めんとしけるに勝藏まじく怒り真先立て戦ひ  
 けるは辛くして猿馬場といふ處はゆき春日が子  
 を始人質をもく切殺し突殺しければ一揆ゆき起  
 り立をづつ長一手勢十七八人打あされ松本に至  
 り木曾義昌を頼り岐岨の山路を分り美濃國岩村よ  
 りゆきそれより清洲へと參上をすとのや  
 右大臣家御法事日限の廻状の事  
 并勝家一益旅宿あて相談の事  
 右大臣殿を紫野大徳寺葬送一奉り御塔を造立して總



見院殿贈大相國一品兼岩浄安大禪定門と稱し奉り七  
 月廿一日ハ七々の御忌日あるに各參詣焼香ある  
 旨三法師君の仰よりて羽柴右近衛少將秀吉奉  
 るとの廻状を出しつゝ濱松へも到來しけるに  
 御參詣ありつゝや否面々の異見聞食るべきとの御定  
 あり本多平八郎忠勝進出右大臣殿御代ハ各別  
 御懇意に御取交しつゝ共それハ時と臨みとられ  
 勢つれ且ハ官位小よりての御事あり累代相傳家僕  
 と共小參拜焼香及びゆきとや上けるを酒井左衛  
 門尉忠勝のやさる處當然ハ羽柴筑前守三法師九  
 を以て右大臣殿の遺跡に定め其身右近少將に任じ三

法師九を補佐して此法事の回状を出せしむれ共其内  
 心ハ右大臣殿の如く當方をも取扱はんとの差略と聞  
 えハ三法師九ハ僅ハ三才あり表にハ主君と立れ共万  
 事ハ筑前守の意次第たるに然ハ今度御上京及び  
 此中と云上しけるを聞食も何れの云處も御胸中  
 も同じく符を合せしむ如し然あがら無沙汰とあさせ  
 られんも御本意ある病中あれば名代を上すべし酒  
 井左衛門大儀あれば罷り上れと仰付らる又柴田修  
 理進此廻状を得て大に悔しけるハ我上杉を責扱んと  
 を望みて北國へ下向し難義の軍して右大臣殿の弔合  
 戦も後れし悔しきその上ハ右大臣殿御葬送の御事



も忘れ今も七々御法事といえれしその口惜さかく  
る大切の事とも都て猿めに先を取まうと残念いり計  
とろかり入あら嫉まうやあふ羨し中と云わがら都の  
おとを延上り疾視つらて立たりけり良ありて勝家  
何々胸中よ會得したるをゆりて見え俄に旅装を整へ  
濃州岐阜へ到り三七殿よゆけるハ君ハ信雄君より廿  
日先よ御誕生ゆりつれども御母の筋目軽しとて三男  
よふきとあふ今度勝家存する旨のゆへハ紫野あて御  
法事の時第一番よ御焼香あるべしその後勝家取計ら  
ふ様ゆりて打連て濃州を發し龍川左近將監一益  
ハ北畠殿と共に上京したりけるが筑前守の役人日岡

よ出迎え柴田龍川兩人ふ向ひ三法師九殿の御意ゆ右  
大臣殿七々御參詣とて各上洛悦びあがりめされゆ  
手狭にて万事不自由たるべくゆへども旅宿を仰付ら  
せぬ緩々休息然るべくゆと埃扱を兩人旅宿ふ入る見  
るよ上段中段下段の坐敷を構へ床よ三尊の名畫を掛  
立華砂鉢心を盡したり風呂の設料理の精進三獻の臺  
馬屋四下場の用意肝をつめ眼を驚らぬ又上杉景勝  
右大臣殿薨去の虚りのり切て上らば大事なりとて此  
方へ切取り城々を返り和睦を調ひ上おれバ無沙汰  
に為べき様ありとて此法事の事を告たりしかば景勝  
心得を氣ふて居たりけるを直江山城守天晴氣の利た



秀吉の昨日ハ敵とあり今日ハ味方とあり弓箭取  
 の常にして既に和議調ひ上ハ一家も同じ然ハ何ぞ  
 吉凶とも相互小音信せざらんや是ハ筑前守が當方を  
 試る計策にハ某御使として上京し筑前守が様を能々  
 見定めてそのうち又調略もゆべしとゆければ景勝實  
 りと同心し直江を京へ上せり又毛利輝元ハ福原  
 越前守小早川隆景ハ中川主馬首吉川元春ハ谷川市太  
 夫を上せり各案内よりきて旅宿よ入ゆづれも馳走  
 驚きとあり柴田と龍川が旅宿ハ同じ處めて軒を  
 連ね隣り勝家一益を招きてや様あし筑前守が  
 今度の取賄ひその費用ゆくと云て計る人の少本

能寺にて初月忌の法事に千部讀經の作善を營て今ま  
 大御葬送御七々の御追福を大徳寺にて執行ふその金  
 銀米錢何れも入用あやその上ハ我等をどめ諸家の  
 旅宿の手當すとも透間あり此のの大儀を我等へ  
 無沙汰よせし心あり但筑前守悪くして御法事  
 に出仕せし天下へ對して詞あり瀧川殿ハ何と思を  
 れゆと問ハ一益答ふる様何さま筑前が今度の仕様  
 氣儘の至りと申べし然しあがら我々が方ハ第一の後  
 れハ故殿の御為ハ明智に向て箭一ひも射び第二よせ  
 りて安土の御城にても取めくすさあくハ日野へ衆  
 上し三法師君を守護すべし如何よろらたくて



此大儀を一人にて執行しをわたりつ顔あくし然と  
も万事六日の菖蒲とありつれば猿めが後舞をんと口  
惜とゆき云計りありと云バ一益心付て勝家より様大  
徳寺へ香奠を獻ずる柴田殿ハ何程の御用意よ中と  
問勝家聞てゆりゆり香奠用意仕りてゆ是ハ某織田家  
随一の家格たるを以て黄金五拾枚用意ゆ猿めハ當家  
の先格を知らしければ是計ハ勝家が仕あてゆと覺  
えゆと云バ一益我等ハ白銀百五拾枚用意してゆ柴田  
殿とも違ひ新参あれば然るべくゆちんと云柴田家來  
を呼で其方今より大徳寺へ行よをわたり羽柴が香奠  
聞て参れと云付て出遣中ぐて走歸り勝家より様大

此大儀を一人にて執行しをわたりつ顔あくし然と  
も万事六日の菖蒲とありつれば猿めが後舞をんと口  
惜とゆき云計りありと云バ一益心付て勝家より様大  
徳寺へ香奠を獻ずる柴田殿ハ何程の御用意よ中と  
問勝家聞てゆりゆり香奠用意仕りてゆ是ハ某織田家  
随一の家格たるを以て黄金五拾枚用意ゆ猿めハ當家  
の先格を知らしければ是計ハ勝家が仕あてゆと覺  
えゆと云バ一益我等ハ白銀百五拾枚用意してゆ柴田  
殿とも違ひ新参あれば然るべくゆちんと云柴田家來  
を呼で其方今より大徳寺へ行よをわたり羽柴が香奠  
聞て参れと云付て出遣中ぐて走歸り勝家より様大

大徳寺へ参れと云付て出遣中ぐて走歸り勝家より様大



徳寺へ罷向ひ知事の僧は向ひきてもく大造ある御法  
 事あり御香奠もさぞ夥しく納りひひくおん中を  
 其僧の御中と筑前守の獻備ハハ此御贈官  
 贈位より御葬送御法事の經營莫大の事ありに御香奠  
 黄金五拾枚白銀三百枚青銅一万貫精米千俵にて  
 語りゆと云ハ柴田も龍川も顔見合を志しあされて  
 詞あり柴田をりて白銀三百枚を添を中と思ひつれど  
 も越前迄ハ程遠く京都にて才覺せんよも用達あり為  
 方おけまら勝家種々と工夫しつれ共金子のとおれど  
 天よりも降を地よりも湧は夜の中も明をあらざる比  
 柴田も龍川も使者を出し立て大徳寺へ献上しめく

るものすら猿めよわくれしもの口惜さよと額をあら  
 りて語りあふ

天正十年の頃黄金一枚米三拾五石は替といへハ五  
 拾枚ハ米一千七百五拾石の價あり當時の一千七百  
 五拾石ハ今京升少て一千六百八拾石は當る四斗俵  
 四千二百俵に准を今の米價凡二千百兩と知べし二  
 千百兩を五十に歸ハ黄金一枚今の四十二兩は替と

聞ゆ

江州安土總見寺の位牌ハ總見寺殿贈大相國一品  
 泰巖大居士天文三年甲午五月廿八日生吉法師天正  
 十年壬午六月二日とあり又三州長興寺藏する所の



眞影まゐりの天徳院殿一品前右相府泰岩淨安大禪定門  
天正十年壬午六月二日御他界右信長御影の御報恩  
相當於一周忌之辰描之三州高橋長興寺與語久三郎  
正勝寄進之天正十一年六月二日とありて上下の御  
影あり

重修眞書太閤記八編卷之九終



